

【ポスター発表】

**精神障害者へのホームヘルプサービスに対するホームヘルパーの困難感の認識**

—ホームヘルパーを対象にした質問紙調査から—

○ 大阪市立大学大学院 清水 由香 (3900)

キーワード：精神障害者・ホームヘルプサービス・ホームヘルパー

**1. 研究目的**

精神障害者へのホームヘルプサービス(以下、ホームヘルプサービスをHHSと略)は、現在、障害者自立支援法の「居宅介護」として実施され、国の制度化から10年経過した。障害者自立支援法以降、精神障害者へのHHSに関する課題がいくつか指摘されている。名城(2009)は制度的に行政の関与が難しくなりケアマネジメント機能が果たせず、関係機関との連携や事業所の抱える課題を相談する機関の確保の困難から、現場のホームヘルパー(居宅介護従事者)(以下、ヘルパーと略)が苦勞するという連鎖的な提供システムの課題を示した。事業所やヘルパーらへのサポート体制の重要性とその課題は、林(2006)(2009)らの研究でも指摘されている。以上から、精神障害者へのHHSに対するヘルパーの困難感の現状把握、および精神障害者へのHHS提供経験との関連性を明らかにすることで、ヘルパーへのサポートニーズを明かにし、今後の精神障害者へのHHSの研修や教育的支援のあり方に関する示唆を得ることを目的とする。

**2. 研究の視点および方法**

調査対象者はHHSを提供するA事業団体(4事業所)が所属職員対象に行った研修会に参加したヘルパーである。研修会は精神障害者の理解とHHSに関する内容(60分)で、2010年11月6日に開催した。参加者に研修直前に自記式質問紙を72通配布し、研修後10日間以内の郵送回収とし、36通(回収率50%)回収した。質問項目は、個人属性の他、社会的距離意識や研修の感想等に関する内容を含むが、今回は、精神障害者への援助の困難感と精神障害者への支援経験を取り上げて報告する。精神障害者のHHSを担当する上での不安感や困難感に関する先行調査(丸山ら2001)(林ら2006)を参考に信頼関係の構築やコミュニケーションのとり方、サービス提供で困惑や躊躇するような利用者の行動や言動、治療・療養の自己管理の支援、病識に関すること、アセスメントや支援方針や支援の程度、支援目標の設定に関することを独自に21項目設定し、同領域の研究者やHHS提供経験者によるエキスパートレビューをうけた。「利用者の精神的な様子が把握しにくく困難」という設問に対し、「まったく感じていない」「あまり感じていない」「困難かどうかわからない」「少し感じる」「とても感じる」を設定し、1点~5点を付与した。分析は、精神障害者へのHHS提供経験者群と未経験者群ごとに各項目の平均得点を比較しt検定を行った(統計解析ソフトSPSSver.17.0)。

### 3. 倫理的配慮

事前に研修主催者に調査実施の説明し、承諾を得た。調査対象者には文書と口頭にて研修開始前に調査の目的、個人情報保護の方法、参加は自由意思に基づくこと、調査結果の公表、および回答により以上の内容への同意と見なすことを説明した。

### 4. 研究結果

1) 分析対象者の個人背景は、最も多かった年代は50歳代(52.8%)であった。ヘルパー経験年数の平均は6.60(S.D.±3.81)年、資格は介護福祉士が36.1%、ヘルパー1級が13.9%、2級が47.2%だった。精神障害者へのHHS提供経験者は27.8%だった。

2) 精神障害者へのHHS支援の困難感：全体で「とても感じる」の割合が高かったのは、「性的な言動や態度が見られる人への対応」(61.6%)「死にたいという訴えや自傷行為の対応」(58.3%)であった。精神障害者へのHHS提供経験群と未経験群の平均点の比較により、経験群で平均点が高かったのは、「利用者の精神的な様子が把握しにくい」、「どこまでヘルパーが援助をするべきか、見極めにくい」、「ケアマネジャーがついていないケースは、居宅介護だけで利用者の課題を抱え込んでしまうため支援が行き詰まる」であるが、これらは統計学的有意差を認めなかった。統計的な有意差を認めたのは、いずれも未経験群で平均点が高く、「幻聴・幻覚時の対応」( $t=-2.173$   $df=31$   $p=0.05$ )、「暴力を受けたり、受けそうな場合の対応」( $t=-2.256$   $df=32$   $p=0.044$ )、「性的な言動や態度が見られる人への対応」( $t=-2.451$   $df=32$   $p=0.032$ )であった。

### 5. 考察

精神障害者へのHHS提供経験の有無により、困難感の内容に特徴を認めた。未経験のヘルパーは精神疾患の症状や、逸脱した態度や行動に対する不安感をもつ傾向があり、この点を考慮した未経験者への研修を充実する必要性が示唆された。また、これは経験を重ねていくことで不安が軽減していく可能性も本結果から読み取れた。経験者の傾向は、統計的有意差はなかったものの利用者の心身の状況を把握することや援助すべきことを見極めることへの困難を比較的感じやすく、これは、林(2009)が指摘する、効果的な自立支援やどこまで支援するとよいのか見極めが難しいといった「自立支援に迷う」、「不全感がありながらの支援」という概念に近い。経験者には、効果的な自立支援のサービス提供に資するための研修・教育的なサポートが求められると考える。本結果はサンプル数が少なく、限定的である。よって今後、対象を拡大して関連要因との検証が必要とされる。

#### 引用文献

- 林裕栄・渡邊敦子・齊藤敦子(2006)「ホームヘルパーの精神障害者支援に関する失敗経験や支援困難の認識」『日本看護学会論文集：地域看護』, 37, 164-166.
- 林裕栄(2009)「精神障害者の生活を支援するホームヘルパーの思いの構造」『日本在宅ケア学会誌』13(1), 46-53.
- 丸山由香・榎野葉月(2001)「精神障害者ホームヘルプの研修をどう進めるのか」『地域精神保健福祉情報Review』, 34,16-21.
- 名城健二・久貝興徳・國吉和子・他(2009)「沖縄における精神障害者ホームヘルプサービスの現状と課題」『地域研究』(5), 55-60